

# 風を切り裂く ガラス装飾

文 ヴァンサン・ブヴェ  
写真 サム・アームストロング

きらめくヘッドライトに、流線形のボディ。  
高速で走る車のボンネットを飾る、ルネ・ラリックの  
フードクレストマークと共に光り輝いていた1920年代。  
アールデコの時代にありふれた金属ではなく、ちらちらと  
光を反射するプレス成形ガラスを用いて製作した装飾は、  
スタイリッシュな高級車をより完璧なものにした。



トルベード・カプリオレ (1938年)のボンネットを飾る「勝利の女神」。1928年に休戦10周年を記念して製作されたこのマスコットは、同年、パリ国際自動車見本市で大好評を博し、ミネルバの高級車にも装着された。

今にも飛び立ちそうな「大とんぼ」。回転ディスクを備えた巧妙な装置で、マスコットを内側から照らすと、車のスピードに合わせて羽ばたいているように見える。[次ページ]

[前見開きページ]「風の精霊」の名でも知られる「勝利の女神」のクローズアップ。肌の部分はサテン仕上げ、風にたなびく髪は透明仕上げで表現されている。[次ページ]

第一次大戦の混乱のなかで幕を開けた狂騒の1920年代は、スピード神話とそれに伴う機械の美学に特徴づけられる。当時の文化的生活は、自動車、列車、蒸気船の永続的な運動に対する憧れを色濃く反映していた。1923年にアルテュール・オネゲルが作曲した、蒸気機関車を想起させる「パシフィック231」(または「交響的断章第一番」)、ポール・モランの自伝的小説「急ぐ男」(1941年)、そしてお馴染みのF・スコット・フィッツジェラルドなど、枚挙に暇がない。

第一次大戦が終わると、都市は自動車に占拠された。ベルリンでは、ポツダム広場にヨーロッパ大陸初の信号機が設置され、パリでは、ジャン・ゼリゼ通りに大手自動車メーカーが豪華なショールームを開設した。カール・スワラーは人気の娯楽であり、社交行事だった。写真家ジャック・アンリ・ラルティエが残した終わりのなき娯楽の小宇宙のなかで、「自動車の優雅さ」をめぐって、ジャンヌ・ランバン、ジャン・パトウ、マドレーヌ・ヴィオネといったファッション・デザイナーの才能と、アンリ・バンデル、ジャン・アンリ・ラブルデット、アンリ・シャブロンなどの車体製造者のそれが競い合う。車は男性特有の趣味ではあったが、1925年にはフランス人デザイナー、ソニア・ドロネーが、女性用スーツや服飾小物に施していたようなカラフルな幾何学模様を、シトロエンB12に配している。それはさながら、車輪に載ったアーティスト・ポートフォリオのようだった。

宝飾デザイナーでガラス工芸家のルネ・ラリック(1860~1945年)は1906年、シチリアの公道で行われる危険なレース、タルガ・ヴィンチエンツォ・フロリオの勝者に贈られる金の優勝プレートをデザインした。これが自動車業界との最初の出合いだが、高級車のフロントグリルを飾るラジエーターキャップ(マスコット)をつくり始めたのは、1925年になってからのこと

だ。むき出しだった冷却回路が車体に内蔵されるようになる。ラジエーターキャップは不要になったが、ボンネットの先端に装着されるこの装飾は、車の外観を完成させる重要な要素だった。1920年代から1930年代にかけて、世界中で何千種類ものマスコットがつくられ、ドライバーは自分のイマジネーションと経済状態、次第で、人目をさらうことができた。人や動物をかたどったマスコットの多くは、クロム、銀、光沢のあるブロンズ仕上げなどの金属で鑄造されていた。

ルネ・ラリックは、女性の姿態や動物から着想を得た約30種類のモデルを製作している(だが、彼がジュエリーで多用した花は用いられていない)。「勝利の女神」(あるいは「風の精霊」)「五頭の馬」「スピード」「エプソム」「彗星」「きつね」「ふくろう」「ロンシャンA」「ロンシャンB」「クリュセイス」などは、車のラジエーターキャップとして考案され、基部には、車体に装着するためのクロム製のリングが付いている。ラリックのマスコットは、透明の成形ガラスに色をつけたものや、青緑色や乳白色に加工したもの、または色ガラスで製作されている。クリスタルを使ったものはない。

ラリックは、1925年に「五頭の馬」「彗星」「はやぶさ」、1926年に「射手」、多作の年となった1928年には「ちゃぼ」をはじめ、「はいたかの頭」「雄羊の頭」「雄鶏の頭」「鷺の頭」「孔雀の頭」などの一連の頭像、「グレーハウンド」「聖クリストフォロス」「燕」「大とんぼ」「小とんぼ」「蛙」「勝利の女神」などの作品を発表した。さらに1929年には「ロンシャンA」「ロンシャンB」「エプソム」「いのしし」「パーチ」「スピード」「ウー

ダン雄鶏」「ほろほろ鳥」を製作している。このラジエーターキャップ・シリーズは、1930年の「きつね」、1931年の「クリュセイス」で終わる。台座を除くマスコットの高さは9センチから20センチ、幅は12.5センチから25.6センチだ。

人間の最も高貴な獲得物といわれる馬は、ラリックのカタログのなかでも特に目立つ。1925年にシトロエンのためにデザインした「五頭の馬」は、自動車メーカーから依頼された唯一のマスコットである。サテン仕上げとポリッシュ仕上げでたてがみを表現した「エプソム」と「ロンシャン」は、イギリスとフランスの有名な競馬場を連想さ



せるが、後者はバルテノン神殿のフリーズからインスピレーションを得たようだ。

狩猟がテーマの「はやぶさ」「グレーハウンド」「ほろほろ鳥」「きつね」「いのしし」に対し、「蛙」「ふくろう」は田園地方を題材にしている。頭像は、秀逸な鳥シリーズを構成する「鷺の頭」はいたかの頭、「孔雀の頭」「雄鶏の頭」のほか、「雄羊の頭」があり、勝利や果敢さを象徴している。躍動的な「彗星」は、1932年にココ・シャネルがデザインした同名のジュエリーにも影響を与え、地球を睥睨する。「とんぼ」や「燕」は空気の流

PHOTOGRAPHS: WITH THANKS TO NATIONAL MOTOR MUSEUM, BEAULIEU ALAMY

## 「自動車ラジエーター用 発光キャップ」は、マスコットを 内側から照らすことができた。

【次ページ】  
 (左) 1928年にデザインされた、王者の風格すら漂う「孔雀の頭」。透明仕上げとサテン仕上げのガラス製だが、希少なターコイズブルーのものも存在する。  
 (右) 透明ガラス製の1928年の作品「燕」。頭を下に向け、尾と翼を上空に向けている。

【当ページ】  
 (左) アンドレ・シトロエンが、1922年に発売されたトルベードへのオマージュとして、自身の新型5CVに取りつけるため、1925年に製作を依頼した、跳ねる「五頭の馬」。写真はアメジスト色のガラス製。  
 (右) 1928年にデザインされた「ちゃほ」。トパーズ色のガラス製で、尾羽と鶏冠はスモーキーなブラウンで着色されている。台座には「Rラリック」のサインが刻まれている。

その一方で、人体を描写した作品は多くない。「セイレーン」と「ナイアス」はファンタジーの部類に属する。「勝利の女神」は人物像というより、むしろ象徴的な作品で、サテン仕上げとポリッシュ仕上げによる、風に吹かれて長くなびく髪が印象的だ。「スピード」と「クリュセイス」だけが、裸体を巧みに反らせ、風の感覚を乗し込んでいる。円ななりに、サテン仕上げの沈み彫りでモチーフを表現した「射手」のシンブルな線は、古代の彫刻を思わせ、「聖クリストフォロス」は、昔から変わらぬ旅人の守護聖人の心強い姿を想起させる。カーマスコットは、20世紀初頭、イギリスのハンプシャー州ビューリーの第2代モンタギュー男爵が、所有する車に取りつけた、聖クリストフォロスに始まったと伝えられている。

ガラスのマスコットは透明なので、内部に照明を仕込めば、色をつけることができる。6Vのダイナモライトでマスコットを内側から照らす「自動車ラジエーター用発光キャップ」の特許が、1929年1月22日付で登録されている。明るさは、車の速度と時間帯によって変化する。全体に色を行き渡らせるために必要とされたのは、小さな色つきガラスのブレードやゼラチンシートのみだった。

ラリックのデザインはイギリスの市場を沸かせたが、彼もまた親英家で、1876年から1878年まで、ロンドンのクリスタルパレス美術学校で学んでいる。ロンドンでラリックの総代理店を務めるナイツブリッジのブリープス画廊は、需要に応じて、マスコットを、作品名を刻印したメタルの台座に載せて販売した。ちなみに同社は「セイレーン」をマスコットとして販売したが、フランスでそのように販売されることはなかった。1929年、ラリックはイギリス皇太子（後のエドワード8世）のために、跳躍する「グレーハウンド」をデザインしたが、これは極めつきの限定版だ。

安全上の理由から1937年以降、カーマスコットはカタログから消え始めるが、イギリスでは販売され続けた。ラリックは、装飾的な彫像、文鎮、ブックエンドと同じ原型と金型を用いたオブジェを、黒いオパリンガラスの台座に取りつけて市場に送り出した。

フランスの国立自動車博物館には、100点を超すラジエーターキャップのコレクションと共に、ふたつの大戦の間を彩った豪華な自動車も展示されている。カリフォルニアのマリン自動車博物館も、アルデコ期のフランス車の宝庫だ。ここでは、ブガッティ、ドラージュ、ドライエ、イスパノ・スイザ、ヴォワザン、タルボ・ラーゴといったスポーツカーの名車のボンネットに、素晴らしいマスコットを見ることができ。

イギリスのビューリーにある国立自動車博物館は、2018年から、ラリックのマスコット28点を集めた個人コレクションを展示している。6年の短期間で収集されたこの作品群は、現在貸出中、同館はさらなる収集のための資金調達を模索している。所有者のベン・ヘインズは、ロンドンとメイデンヘッドでオークションを開催するドーソンの創業社長だ。ベテランの釣り人だけにオークションで「パーチ」に一目惚れして購入したのをきっかけに、ラリック作品にのめり込み、次々と入手するに至った。

「彗星」「ふくろう」「きつね」が加われば、ヘインズのコレクションは完成するのだが、これらの作品は特に人気が高く、入手するのは容易ではない。需要は世界的に高く、状態のよいものは価格が高騰している。作品の脆弱性を考えると、欠けないマスコットを見つけるのは困難だ。ヘインズのコレクションのなかで最も高価な作品はおそらく「勝利の女神」で、価格は約3万ポンド（約420万円）になる。ラリックのカーマスコットを全種類所有しているのは、世界でも、愛知県長久手市にあるトヨタ博物館だけだ。市場には偽物が多く出回り、オリジナルの多くは欠けているか、台座が摩耗している（オンラインカタログやralique.comの販売情報ページで最新の価格を知ることができる）。

晩年、ルネ・ラリックは正真正銘、生きた宝となった。1945年に他界した時、ラリックのカタログには1500点を超すガラス製品が掲載されていた。それらのマスコットは、ロールスロイスやベントレー、ジャガー、メルセデスがカーマスコットの伝統を今日伝え、車がより装飾的だった時代を彷彿とさせる。

